

市井の女性の日記残す



「個人の記録を社会の遺産に」をテーマに、一般の人の日記を収集して研究している。28年に及ぶ活動で県内外から寄せられた日記は、3000冊余り。地図や年表を作

りながら、時代背景や心の動きを読み解く「女性の日記から学ぶ会」の代表を務めている。空白にも魅力がある。日記のページ全てに人生が詰まっているのよ。日記をめくると、内容だけでなく、帳面からも多くのことが読み取れる。子どもの頃のかわいらしい筆文字からはみずみずしさを。戦時中の2、3行の走り書きからは多忙と疲れを。戦後の活力のあふれた文字からは家族を背負う覚悟を――。ささやかな日常から節目節目

「学ぶ会」代表

島 利栄子 さん 80

の出来事まで、その人の生涯を通じて時代を立体的に感じとり、後世に残すことが目的だ。

筑北村出身。県内で高校教諭を務めた後、夫の転勤先の山口県で1980年に、お年寄りから地元歴史や風習に関する話を聞き、書き残す活動を開始した。長野県内で聞き書き活動を行っていた95年、飯田市の元教師の女性から「日記の処分困っている」と相談を受けた。空襲で教えずと防空壕に逃げた経験がきっかけで、「市井の女性の歴史を知る大切な資料を守らなければ」と思った。

男性の日記は、社会的に

◇し・ま・り・え◇ 1944年、旧坂北村（現・筑北村）生まれ。松本深志高校、信州大学を卒業後、須坂高校での教員生活を経て、夫の転勤に合わせて80年、山口県で聞き書き活動を開始。90年、長野県でも聞き書きを始め、96年に「女性の日記から学ぶ会」を創設。4人の孫がいる。

「学ぶ会」の歩みを記録した冊子の表紙 2016年発行、島さん提供



が子のことばかり。それでも、前を向こうと仕事に奮闘する様子も書かれ、心情に心が揺さぶられた。

人生の終幕を意味する日記の最後の一文は、常に襟を正して読むという。「どんなことがあっても人生は終わるのだな」と、もはや会うことがかなわぬその人に思いをはせる。

貴重な資料を広く知ってもらうと、一部は書籍化し、筑北村の実家に保管所「日記の館」も設けた。現在の会員数は170人。会員には「大事な物を預けてもらうありがたいさ」を忘れないでほしいと願う。個人的な日記を読ませてもらっているのは、相手に信頼してもらっているからだ。

150人分の約3000冊に及ぶ。

どれもその人の生き方が映し出された無二のもの。特に忘れられないのが、戦後の混乱期の女性の日記だ。将来を誓い合った男性が戦死し、他の人と結婚して子宝に恵まれたが、結婚生活がうまくいかなかった。追い出されるように家から離れた後も、心配ごとや思いなど、記すのは我

「一生懸命生きた証しだと言えはそれまでだけど、書く人それぞれにもっと深い思いがあるのでは」と考える。伝えたい思いがあるから書くのか、伝えたい思いは何なのか。日記にはもっと深い魅力があるのではないか。自身も70年以上書き続けた日記を、いつか会に寄贈するつもりでいる。（安田ななか）